

## 令和元年度 第2回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会 会議録

日 時：令和元年 8月 28日（水）18：30～20：30

会 場：練馬区立区民・産業プラザ（ココネリ）研修室1

## 1. 事務局長挨拶

お忙しい中ご出席いただき、ありがとうございます。委員のみなさまには第5次計画（以下：第5次）の執筆にもご協力、ご苦勞をおかけしています。執筆後も事務局と調整をいただき、ご協力に感謝いたします。本日は資料の目次に沿って整理をさせていただいている状態ですが、若干生煮えの状況です。これから社協として問題意識を持って、向こう5年間どのようにやっていくかがはっきり伝わるように整理をさせていただきたいと思っておりますが、今日は整理に向けてどんな考え方でやっていけばよいか、様々な意見をいただきたいと思います。

暑い季節が終わり、涼しくなってきましたが、九州では大雨で天候が不順で心配です。今日もよろしくお願いいたします。

<新任委員からの挨拶>

7月から管理課長を拝命しました。区もまちづくりの計画を立てているので、両輪でという形になるかと思っております。地域の方にとって住みやすいまちをみなさんと考えていければと思っております。よろしくお願いいたします。

## 2. 配布資料確認

## 3. 第5次地域福祉活動計画について 【資料1】

前回の委員会の時に骨子をお示し、方向性としては良いのではないかとのご意見をいただいた。今回はその骨子を膨らませ、文章化した。しかし、章立てごとに執筆者が違うこともあり、全体を通してまだ整理できていない状況であることをご了承いただきたい。また、執筆する中で、具体的にイメージできていない部分もあることがわかってきたので、ご意見をいただきたい。

### □はじめに（P1）

前委員長から「地域で暮らす住民の力を育てるためにも、住民自らが自分たちの計画を作ったほうが良い。練馬はその段階に来ているのではないか」とのことばを受けて書いている。

### □第1章『一人ひとりの住民が参加して創る地域社会に向けて』（P4～P6）

練馬区社協が目指す姿や普遍的な価値観や理念、多様性を認め合うあたりまえの社会を実現するために、「創意工夫」と「市民参加」の視点で書いている。この中でも「多様性」に着目をされている。「多様性が今後さらに進む中で、地域課題も広がりを見せている。その中で社協は地域住民と協議を重ねつつ、あるべき姿を見失わないよう進んでいく必要がある」と投げかけがあった。最後に締めとして「地域福祉のおもしろさ」といったことばも書いている。

### □第2章『練馬の地域福祉をめぐる現状と課題』（P7～P12）

#### 1. 第5次計画の計画期間（2020～2024）における社会情勢

- (1) 「2025年以降、練馬をどうしていくのか」と投げかけがあった。
- (2) 国の施策にも触れながら、「練馬らしさを活かした地域共生社会に向けて」をテーマに書いてい

る。

- (3) 東社協で示している「東京らしい“地域共生社会づくり”のあり方について」より、多様性こそが東京の特徴としてまとめている。

## 2. 第4次地域福祉活動計画の成果と課題（第4次地域福祉活動計画：以下 第4次）

- (1) 第4次で「地域の気づきの視点」と「個別の育ちあいの視点」の2つの視点をもとに、地域福祉コーディネーターが地域に出向き、ネリーズと協働で小地域福祉活動（以下：小地域）の推進を目指したことを書いている。
- (2) 第4次の実践を通じて改めて確認できたこととして4点の整理をした。
- ①第4次ではネリーズを増やしていこう、ネリーズ＝地域を良くしたいと思っている人を増やしていこうと4地区で懇談会を行いながら、ネリーズは練馬らしい地域福祉マインドそのものであることを確認することができた。
  - ②第4次ではネリーズ通信を作成したが、それだけでは発信力に限りがあるため、エピソードを積み重ねながらそれを発信するツールとしてネリーズかるたを作った。さらに発信力を高めていくことが必要であることも確認することができた。
  - ③第4次ではネリーズ懇談会や大交流会を開催してきた。また、社会福祉法人等のネットの連絡会も4地区で始めた。こうした2つの新しい協働を“顔の見える関係”で進めることができた。
  - ④ボランティアコーディネーターや生活支援コーディネーターを兼ねることで地域福祉コーディネーターをボランティアセンター・コーナーに配置し、社協の全部署でも関係機関と連携し、小地域に取り組んできた。その中で地域福祉コーディネーターはさまざまな方々と出会ってきた。地域住民が生きづらさを抱える人を地域住民ならではの視点で発見し、専門機関へつなぎつつも、自分たちにもできることを実践しようとする方々との出会いである。第3次計画では人口3万人規模としていたエリアに限らず、住民の生活範囲で地域住民ならではの視点で気づいた生きづらさを地域の課題として捉えていくために、より一層、地域住民ならではの活動と連携する大切さを確認することができた。

## 3. 練馬区社協をめぐる状況

第4次では区でも区民協働交流センターを新設し、地域活動等に関する相談窓口を設置し、区民参加と協働を進めているという動きがあった。社協においても区からの受託事業が増えたり、組織改編（統合）があったが、練馬区社協らしさを活かしながら、対象を限定せず視野を広げ、行政・関係機関とも更なる連携を図り、「ひとりの不幸も見逃さない～つながりのある地域をつくる～」を目指し、「気づき、育ちあう」地域づくりに向けて取り組んでいくことを書いている。

## 4. 地域福祉計画と地域福祉活動計画

双方の計画は両輪で練馬らしい地域福祉を推進していくことを書いている。

### □第3章『これからの練馬区の地域福祉推進』（P13～P14）

「第5次計画に寄せて」をテーマに執筆いただいた。地域で暮らす住民同士として「誰もが暮らしやすい社会」を一緒に創っていく担い手として捉える視点が、お互いに支えあっていく力を高めていく上で重要であることや、地域住民との出会い、第5次に向けた思いを書いている。

## 1. 第5次地域福祉活動計画の推進

内容にもう少しボリュームを出したいと思っている。第4次では、地域福祉コーディネーターが地

域に出向き、ネリーズとともに地域福祉推進に取り組むことを提案してきたが、第5次においては、「つながり支えあう地域をつくる」「それぞれの生き方を支えあう」という2つの柱を立てて取り組んでいく。キーパーソンについての説明や、これまでエリアを設定し「小地域」と前面に言ってきたことを、住民の生活範囲に合わせた活動という視点で書いていきたいと考えている。P15には体系図を示したので、この部分についてもご意見をいただきたい。

## 2. 計画の柱1：つながり支えあう地域をつくる

### (1) 住民主体の地域づくり

#### ①誰もが参加できる地域活動の推進

さまざまなテーマを設定しながら、住民が地域活動に取り組むきっかけを書いた。災害をテーマに地域活動への参加を促していきたい。

#### ②ネリーズの取り組みの充実

ネリーズ懇談会を開催しながら、ネリーズの取り組みや思いを広げていることを書いた。作成したかるたを活用したりして、懇談会等で共有・意見交換を積み重ねていく。

#### ③キーパーソンと地域福祉コーディネーターとの協働

地域の課題を住民がキャッチし、いち早く行動していく方をキーパーソンと呼び、協働していくことが大切であることに気づいた。また、委員に執筆していただいたようにNさんは体の不自由さをマイナスと捉えることなく、人生が開ける希望を与えてくれる人であることにキーパーソンである委員が気づき、ネリーズ懇談会に誘い、つないでくださった。それがキーパーソンの存在である。

#### ④災害に備えた地域の関係づくり

内容をお目通しいただきたい。

### (2) 分野を超えたネットワークの構築

#### ①社会福祉法人等のネットワークを活用した仕組みづくり

今後は民生委員やNPO、地域活動団体とも一緒に進めていく。文章が多いので、コラムを挟んでいきたいと考えている。

#### ②地域課題を共有できるネットワークづくり

生活支援コーディネーターの活動においても、全区やエリアごとで協議体を開催している。高齢・児童・障害等多様な機関と連携していく。こちらもコラムとして事例を入れる予定である。

#### ③地縁組織や地域の様々な活動の連携を深める

第5次でも町会やネリーズ、児童館など、地域との連携を深め、社会資源の創出と活動が充実するように取り組む。また、社協の強みとして複数の拠点を活用しながら、町会自治会と連携していくことにもふれていきたい。

## 3. 計画の柱2：それぞれの生き方を支えあう

### (1) 項目名は検討中

#### ①複合的な課題への対応

昨今の課題に対して、各分野が連携を図っていくことの重要性を書いた。空白部分(図)は関係機関と連携する前と後の違いを示したい。

#### ②生活・就労の一体的な支援

社会生活を送るうえで、働くことは生活の一部であることから、生活・就労の一体的な支援をしていく。

③関係機関との連携強化

さまざまな関係機関との連携を強化していく。

(2) 権利擁護の視点をもった地域生活支援の推進

①当事者の力を活かした福祉教育

福祉教育についての説明をしており、当事者とともに進めていく。

②はざまの支援・隙間をつなぐ

一人ひとりの意思決定を尊重した制度利用を選択できるように情報提供を行うとともに、制度だけでは支えきれない地域生活課題に対して住民とともにネットワークづくりを強化していく。

③福祉従事者の育成

練馬障害者福祉人材育成・研修センターで位置づけている目指すべき人物像の図を示したが、もう少し内容を具体的に膨らませたい。

□当日配布資料としてお示した社協の主な関連事業一覧

2つの柱「つながり支えあう地域をつくる」「それぞれの生き方を支えあう」に基づいて、各部署・委員会の取り組みを示していく。

特に議論したいのは、第2章の4点の整理の部分である。職員間でも第4次を進めてきた感想の議論を積み重ねているが、今日は職員からも生の声を発表してもらいたいと思っている。

ボランティア・地域福祉推進センター職員

部署でも地域福祉活動計画の振り返りを行っている。第3次から小地域の推進が行われてきたが、実際に「小地域」の推進が行われてきたかを部署で話し合っている。「小地域」ということばが自分自身の日々の仕事に重なり合っていたかと感じるところがある。「小地域」自体をパッケージ化されたモデル事業のように捉えていたところがあり、それ以外の日々の業務は、そこから離れてしまっているように感じていた。その前提の中で、今ボランティアセンター（以下：ボラセン）で取り組んでいることがあるが、それが「小地域」なのかと問われ、私は「小地域」ではないと感じた。

その取り組みを簡単にご紹介する。大泉エリアで住みやすく、つながりのある地域になることを目的とした会議体がある。個別ケースの検討の場ではない。視覚障害のある人をゲストに招いて、その方から見える地域や「もっと地域がこうなればいいのに」ということを語ってもらった。その中で信号の話が出た。その方は練馬に引越してきたばかりで、最寄駅に出るためのバス停に行くまでに大通りがあるが、横断歩道を渡る時に信号に音がついておらず、周囲の音を聞き、おそらく青だろうとの判断で渡っている。その困りごとをなんとかしたいという話をしている。行政に訴えていくだけではなく、その人が地域に住んでいることを知ってもらい、周りの人が声をかけ合えるような顔の見える関係をつくっていききたいという話をしている。

この取り組みが「小地域」かといわれると私はすぐに「小地域」とは答えられなかった。しかし、小地域とは住民がつながりあい、何かあった時に助け合える地域をつくっていくことだとすると、この取り組みも「小地域」だと思えるようになってきた。

「小地域」は3万人エリアと定めがあったが、エリアにこだわらず住民の暮らしの範囲はさまざまなので、住民と一緒に考えている日々の業務はすべて「小地域」の一環であり、つながっていくんだと率直に感じている。

ボランティア・地域福祉推進センター職員

もともとボランティアコーディネーターが地域に出て、地域の課題を発見・共有・解決する土壌にあったことから、まずボラセンに地域福祉コーディネーターを置き、光が丘と豊玉をモデル地区とした。

ボラセンでも3万人エリアを中心に取組んだ練馬の小地域がどうだったかを十分に話し合えていなかった。現在検証を始めている。豊玉地区では地域活動をしている人や団体同士がお互いを知らないことがわかり、知り合いたいと思っている人がいたことから懇談会を始めた。出会ったことで活動が盛り上がり、広がったりと、場の意義や良さを参加者が感じていた印象だったが、何年かたつと「社協が集めたんだよね。次は何をしたいの？」と言われるようになった。情報共有の場としては今後とも必要ではあるが、課題を見つけ、共有し、特に解決していくところまでは難しかったというのが反省点である。いろいろな人が集まるので、共通した課題を絞ることが難しかったとも言える。

一方、共通のテーマや生活範囲で集まった、例えば「協議体」のような会議では、お互いを知ってつながっていくという大切さを知るプロセスは豊玉地区の懇談会と同じだが、お互いが見えている課題を具体的に解決する主体性のある集まる場につながっているのではと考えている。エリアの考え方についても、子育て中のお母さんは3万人エリアに限らず、SNSで全区的につながっているという実情もある。

具体的な事例から考えると、小地域とは3万人という縛りではなく、顔の見える関係は大切にしながらもテーマや生活圏域に合わせて地域福祉コーディネーターが地域に関わっていくことではないかと振り返っている。当初始めた懇談会も役割を終えたら次に行くことも必要だったと思っているが、振り返りが十分にできずに続けてしまってきたという現状もあったのではという意見も出ている。

第3章でネリーズと地域福祉コーディネーターとの協働について進めてきたと書いたが、ネリーズ懇談会を進めている一方で、地域福祉コーディネーターとしてネリーズを意識して声をかけ、課題の解決に向けて動いてきたかということに関しても振り返りが必要だと思っている。

執筆をすることで浮き彫りになってきたと感じている。ボラセンとして、また社協全体としても振り返りを行い、第5次を迎えたいと思っている。

#### ボランティア・地域福祉推進センター職員

社協職員としてもボラセン職員としても2年目になる。2年前は大学生で練馬区社協に社会福祉士の実習で来ていた。その時に事前学習で第4次の計画を頭に入れ込んで実習に参加した。ボラセンでは3日間の実習を受けたが、学生の時はボラセンというとボランティアコーディネーターの印象が印象が強かったが、実習を通して、それだけではなく枠組みや制度の中には収まらないいろいろな相談が寄せられることがわかった。最初はボランティア相談であっても話を聞き進めると、生活上の困難や不安など生きづらさを抱えていることがわかることもあることも知った。

個人の課題だけではなく、それを点と見た時に、線をつないで面として地域を見ていくことを学んだ。社協職員が地域福祉コーディネーターとして地域に目を向けてやっていくことは第4次の計画を見てわかっていたが、そこだけでは見えないことを実習を通して学ぶこともできた。

地域の方と直接相談に関われなかったのが、課題に対してどうやって地域の方と進めていくかは理解できていなかったというのが実習生の時の印象であった。

今は職員として関わる中で、個人だけではなく地域にも同じように悩んでいる人や不安を持った人がおり、どのようにアプローチするのかを地域の方と一緒に考えていくことが地域福祉コーディネーターの役割でもあり、社協の役割でもあることを改めて知った。ネリーズや民生委員と一緒に進めていくことで地域の課題に取り組める、それが社協職員の強みでもあることを身をもって感じている。

しかし、学生とは違った視点が見えてきたことや、小地域や学生の時に理解できなかったことが少しずつ理解できてきた中で、今相談を受けて動いていることが「小地域」なのか、小地域がどうい

ものなのかがわからなくなっている。

第5次に向かう中で、自分自身がわかっていない部分をボラセンとしても社協職員としてもこのタイミングで振り返り、地域福祉コーディネーターの役割も考えていきたい。ボラセンでも話を重ね、整理できればと思っている。

委員長：今日の資料はこれから肉づけをし、書き換えていくそうだが、「ここが足りない」「こういうことを足せば良いのではないか」など、ぜひご意見を寄せていただきたい。職員のできていること、できていないことをみなさんはどのように感じているかをご意見いただきたい。

第4次で「ネリーズ」ということばをつくり、地域のみなさんに説明をして登録してもらってきた。練馬区人口73万人のうちの登録者は700人弱だそうだが、このあたりはいかがだろうか。

委員：昨年の秋にネリーズの懇談会や大交流会に参加した時に感じたことは、いろいろな地域でいろいろな方が活動をしていたり、これから何かをしようとしている人たちが一堂に会す場だったということである。個々で活動している人が集まり、思いや課題を共有する場があることは大事だと感じた。個別の課題の解決は当事者や現場の人が一番わかっていると思うので、どんどん進めていけばいいと思うが、そういう課題が地域にあることを知ったり、共有する場を自分で作ったりすることはなかなかできない。自分の活動でも広報するとなると、肌感覚では伝えることができても、実際に来て活動してもらわないとわかってもらえないので、なかなか難しい。しかし、そもそもいろいろな活動をしている人が集まる場がないので、ネリーズ懇談会はその人たちをつなぐ場の役割であると思う。その場で連携はなかなかできないが、同じ思いがある人がいるんだとか、何かの時には相談してみようと思える場になっていると思う。実際に私も地域活動をしている方からお話をいただき、石神井地域で活動している人たちで話をする場に参加している。そこで印象的だったのは、なぜこの活動をしているのかという個人的な話を聞くと、今の活動につながって自分自身腑に落ち、その人を理解したり、その人の活動から見える姿に納得できることが多々あったことである。そういう機会がつながる、支えあうことの具体的な部分だと感じている。ネリーズの集まりにそのような思いを聞く機会があると、より協力できる関係性ができるのかなと感じている。

委員：前述の委員が語ったことが私の社会の一端の真実を映し出している。先ほどの職員の話で印象に残ったことは、点と線と面という話があった。点はある程度理解できたと解釈した。それを線から面に広げるのはどうしたら良いかと聞こえた。水が満面と貯まっている大きなプールにその水を染めようとインクの一瓶をバケツに希釈して入れるとプールは染まるだろうか。ぜんぜん染まらない。ところが、原液のインクの一滴を杓を区切って入れるとかなり色が濃くなる。インクをまくと一滴の周りは良く染まる。それを希釈してまいてもわからない。自分がやったことがわからない。プール全体を染めることは至難の業である。ネリーズが主体的に動くことは簡単ではない。その人の思想を変えなければならない。それは簡単にはできない。一つひとつを積み重ねていくしかない。ネリーズが700人になったことは大成功だと思う。この人たちが主体的に動くようにするにはどうしたら良いかを考えた方がよい。先ほど「腑に落ちた」と言っていた。その「腑に落ちた」人をたくさんつくるのが大事だと思う。毎日やっていることになかなか色が染まらないと挫折感を味わうことがあるかもしれないが、そんなことを考える必要はない。個々を主体的にすることなんて、なかなかできることではない。プールを染めるには、努力を積み重ねるしかない。

委員：前述の委員の的確な指摘に心から感嘆した。4点についてはきれいにまとまっている。ネリーズかるたはひとつの成果としてPRしていくことも面白いと思う。

P9の第4次の体系図を見ると成果と課題で強調したほうが良いと思う点がある。「地域の気づきの視点」と「個別の育ちあいの視点」、この2つがキーワードだと思う。これをわかりやすく説明することは難しいと思うが、先ほど職員が発表してくれたことで腑に落ちた。つまり、地域でどういうことに気がついていったのかということの1つの事例であり、それが相互に関連し合って顔の見える関係をつくっていくという話ではないかと思う。職員が「これが小地域福祉活動なのか」と言っていたが、そのように活動の中で日々考え続けていくことなのだと思う。関西の社会福祉協議会で多いのが、「地区社協」「校区社協」といわれる行政体の下に顔の見える関係性がある。例えば校区社協では、学校区でもっと顔の見える関係をつくっていくという社協もあるが、これも年代や地域性によってエリア設定が変わってくる。先ほどの職員の話でも、SNSを使って練馬区から外に生活圏域が広がっている中で、顔の見える関係を実際にどうやってつくっていくのかは、活動報告や事例で説明をしていくとよりリアリティがあると思う。

P15の地域福祉コーディネーター、ネリーズ、キーパーソンの説明に苦慮していると思う。ここは正に日々どういうことをやっていて、地域住民と地域福祉コーディネーターがどういう関係になっているのかということ具体的に伝えることがわかりやすい成果になるとともに、第5次の柱として良い計画になるのではないかと感じた。

委員長：事例が古いのではないかと思う。第4次のものがそのまま使われていることが気になっている。また、キーパーソンの説明があまりなく突然出てきている感じがするので、これを見た人がわかるかなとも思う。

委員：P22を見ると、私は町会長をしているが、地域福祉コーディネーターとやっていることは同じだと思う。町会を巻き込んでいけばいいのではないだろうか。町会の加入率は全区で4割を割っている。町会のメリットを説明するのは難しいが、私は子どもたちの社会性を養うことだと思っている。お祭りや盆踊り大会は町会がないとできない。

しかし、子どもを塾に通わせている若いお母さんたちは、地域のお祭りや盆踊り大会が子どもの社会教育になるのかと思っているのではないだろうか。若い人たちは勉強はできるかもしれないが、お祭りや盆踊り大会に行っていないので、小さい時から地域の人と接していない。少子化なので、兄弟で争うことも知らない。今の若い人は塾に行って勉強をして優秀な学校を出ることが幸せだと思っているが、いろいろな事件も起きている。教育の力は関係ない。社協の職員が町会長や地域のお父さんたちに話をしてみてもどうだろうか。

委員長：今の話をコラムにしてはどうだろうか。

委員：私には33歳の発達障害の息子がいる。私と社協をつないだのは息子である。息子は一人旅をするのが趣味になっており、いろいろなまちを回っている。「まちを回るならテーマがあるといいよね。どんなところを見ているの？」と聞いたら、「社協に行っている」と答えた。「それはとっても良いテーマなので、これからもぜひ続けてほしい」と話した。

なぜ彼が社協に行くかというと、知らないまちを訪れると普通は観光案内所に行くが、社協に行くと「目があたたかい」と言う。地域の間人ではないのに受け入れてくれる空気が地方の社協にはあるのかなと思う。ホットステーションとして大変意味のあることだと思うので、その視点はすばらしいと思う。「どうせなら、行ったところの感想文を書いて母に見せてください」と言っている。社協でも地域によって力を入れているところが違うらしく、母と子に力を入れているところ、孤立している人たちの話を聞くことに力を入れているところなどがあるようだ。

息子は10分くらい話すと自閉傾向が見えてくる。それが見えてくると人は避ける。日常的な差

別に苦しんでいる息子の旅行先として「自然を見に行つては」と私は言うのだが、息子は自然志向ではなく、「中核的都市が良い」と言うので、それも良い視点と言った。差別に対してものすごく感度が強く、自分が嫌われていることにデリケートなので、そんな中で「社協は安心だ」と言うのは、社協は大きな存在だと思う。

社協職員が持っている「差別しない、つながろう、困っているなら手をつなごう、話を聞こう」という姿勢がネリーズだと思う。先ほどネリーズが700人で大成功とおっしゃった。差別への障害があったり、分断されやすい世の中だが、700人の目を温かくしてはどうか。差別しないとはどうすればよいかわからないが、ネリーズ懇談会などでつながっていると、普段はつながれない障害者や高齢者とつながれることになるので、ネリーズ懇談会は有意義なものだと感じている。

委員：資料の並びの順番について、P7の第2章の冒頭に「第5次計画の計画期間における社会情勢」とあるが、2020年以降の話が冒頭にあり、その後第4次の話がくるので、わかりづらかった。読む側からすると、時系列で後ろの方に「第5次計画の計画期間における社会情勢」を置いた方が良いと思う。社会情勢がこうだから、第5次はこうしていくと第5次につながるように書いてくれると良いと思う。

「他者と対話をする」「多様な参加のバリエーションを用意することが重要」「人と人が関わり合うこと」とあるが、人と人のつながりや話をする、場所を用意するというイメージがインプットされた。ネリーズ懇談会にこれまで参加したが、私から見ると「キーマンの集まり」というイメージがある。地域や自分の人生において課題を持っていて、その課題を解決したいと仲間と動いている人たちが選ばれて、声をかけられてネリーズ懇談会ができあがっているのかなと思う。それはそれで面白いし、私も活動をしているので、いろいろな活動をしている人と会うことも面白い。

私自身、勤労福祉会館でボッチャの活動をしているが、そこに参加をしていた人が豊玉のネリーズ懇談会に来ていた。キーマンでなくてもネリーズ懇談会に来るのは当然だが、ネリーズ懇談会の頻度が多くなく、そういう出会いを味わったことがなかった。700人のうち全員がキーマン的な存在ではないので、できれば700人の方と会える場所がほしいし、話をしたい。そういう場がネリーズにとって有意義であると思う。

地域福祉コーディネーターが地域活動の一員として参加するのか、ハブ的もしくは中心的にコーディネートしていくのかを、心意気も含めてもう少し明確化してほしい。主導権を握るとか上から目線とかではなく、少なくともポジショニングとしてはそういうことをしていくということを、図も含めて明確にしてほしいし、地域福祉コーディネーターという存在があり、ネリーズの活動が着実になっていけば良いのではと思う。ハブとして活動し、多様な人が出会うような場をつくり、多様な課題があることをわかるようにして活動してもらえると良いと思う。全体を読み、「人との出会い」「会話をする」ということばが心地良かったので、それをリンクして、ネリーズの活動と地域福祉コーディネーターのことをもう少しはっきり書いてもらえれば良いと思う。

委員：P9の「①新たなネリーズによる気づき、育ちあいの共有」について少し気になった点がある。私の町会は人口が1万人、町会加入率50%なので、他の町会に比べると人数や加入率は大したものだと思う。しかし、積極的に活動をしているのは私を除いて高齢者ばかりである。消防やまちの掃除をしているが、若い世代は私ひとりだけである。なぜ若い人が来ないのかを尋ねたところ、近くに小学校があるが、今は共働きが多く、「町会に入りたくない」と言う。「なぜ町会に入らないの？」と聞くと、「町会に入って何のメリットがあるの？」と言われた。年会費はかかるし、やらなくてもいいことをやらないといけないと面倒なこともある。



しかし、町会は子どもの見守り活動もやっているの、子どもが小学校に入った時だけ町会に入る人がいる。人は自分の都合のいいところでしか活動したがない。表向きはこれから高齢化も進んでいくし、なんとかしなきゃいけないと言っているが、裏側では、面倒なことはやりたくないし、親の介護もしなければならぬので、隣の家のことまで見ていられないと思っている。もし、我が事になったらどうなると思った時、考え方はみんな違う。どうすればみんなと仲良くできるのかと思った時に、町会に入ってまちを良くしようと思っている人が入っている。ではネリーズはどうだろうか。ネリーズも地域を良くしたいと思っている。しかし、町会とネリーズの決定的な違いは、町会は1年間で活動計画が決まっていることが多い。ネリーズの良いところは「ゆるやかなつながり」。それが町会との違いだと思う。町会は毎日同じメンバーでまちを良くしようと考えているが、ネリーズはメンバーが同じこともあるが、変わることもあり、ゆるやかなつながりがある。

具体的に言うと、町会は回覧板を回さないといけないうことなど反強制的なつながりである。シールを貼っていないと町会に入っていないこともわかる。しかし、ネリーズにはそういうことはない。まちを良くしようと気楽に話せる場があるのはネリーズの強みだと思う。町会は高齢者中心だが、ネリーズには若い世代が入り、土・日曜日に積極的に懇談会ができると良いと思う。

委員：ネリーズ懇談会では初めて会った人同士がひとりの課題に対して他の方が答え、そこで連携がとれる。また、その方たちが次の懇談会に参加し、新たな方と知り合いになる。そういうことが大泉でもあった。会を重ねるごとにいろいろな方が少しずつ増えてくるというのもネリーズ懇談会の意義だと思う。ネリーズが700人いても、懇談会に来るのは多くて20人。そういう中でも新しいメンバーは必ずいる。その方たちと会うことも意味があると思う。

第4次に比べると表や絵がとても少ないと思う。文字ばかりだと途中でやめてしまうことがあるので、表や写真、イラストがあれば良いと思う。また、文章の中で事例が入っているが、事例は困った方がわかりやすいと思う。

委員：第2章を担当したが非常に悩ましかった。社協で若手のメンバーとディスカッションをしたり、職員と何度も話し合いを重ねて整理をし、みなさんへの投げかけを出発点として書いてみた。まず、第4次にネリーズが登場したことを特徴としてあげた。

①では、ネリーズが協力員ではなく協働推進員である意味、つまりは、やる事が決められてやる人たちではなく、自分たちの気づきを広げていくという我慢強い取り組みを強調したかった。

②では、以前ネリーズ通信を自分たちで作れるようになればいいねという話もあった。気づきを発信していくことに苦労したが、ひとつの成功例として「かるた」があったということは、かるたという手法で何がよかったのかを考えながら、さらなる発信が必要と考えた。

③では、第4次では計画のなかった社会福祉法人等の集まりが生まれた中で、今後ネリーズと社会福祉法人等のネットがどうコラボしていくかを書いた。ひとつの顕実としてP11でも示したが、地域福祉コーディネーターが4圏域に置かれ、とはいえ、社協職員全員が地域福祉コーディネーターであるとの心構えでがんばっていると思うが、ネリーズ懇談会と社会福祉法人等のネットもこの4圏域で行われているということを書いた。

④では、地域福祉コーディネーターの活動の中で新たな人との出会い、場、キーパーソンということばが第5次で出てくるが、単に地域のことに気づいて人に知らせて終わるのではなく、自分たちのできることをしようという人たちと出会ってきたということ、第4次の成果としつつ、生きづらさを抱える人がいるという課題が地域の中にあるということ、地域福祉コーディネーターの意義があるということ、を表現してみた。

委員：第5次に向けての部分で気になることがある。P7に「孤立」のキーワードがひとつもない。あるお母さんと発達障害を抱えた子どもがいる。子どもは15歳の中学3年生の男子でアスペル

ガーを抱えている。家では「ママなんて大嫌いだ」と暴言を発するため、どうすればよいかと相談が入った。子どもは今夏休みなので、うちの施設で預かっているが、施設は日中活動なので限界がある。子どもは普段はとても良い子だが、お母さんに対してはあたってしまう。

ここでのポイントは、お母さんがうちの施設に来るまでどこにも相談できなかったことである。相談窓口はあるが、お母さんはそれを知らない。施設からはお母さんの発達障害に対する対応のアドバイスをするが、根本的なところでお母さんは孤立している。お父さんはお母さんの言うことを受け止めることをしないので、誰もお母さんの言うことを聞いてくれず、ママ友もおらず、お母さんはうつ病になってしまった。これだけ追い詰められてうちに相談に来た。

孤立化させないと言ってもどうすれば良いかという、相談窓口を発信することも大事だが、そのお母さん曰く、「普通の子どもとは違うので、福祉事務所に相談するのは嫌だ」とのことである。心の壁を作っていたお母さんだったが、話をするうちに少しずつ心を開いてくれている。

そのようなことから、マンパワーが大事だと思う。お母さんと打ち解けたことで子どもとお母さんにつながった。地域でどうみていくかが大きな課題だが、こういう事実があったことをみんなが発信していかなければならないと思う。発信することが大事だと思う。

委員：P7に「練馬らしさ」というキーワードがある。練馬らしさが何かを考えた時に、P9の改めて確認できたことの4点が練馬らしくやってきたことだとすると、これを受けて第5次はどうやって進めていくのだろうと思う。

練馬らしさ、練馬で作ってあげてきたものを第5次で社協として作るので、練馬区独自の練馬らしさをアピールできるのではないかなと思う。第4次で気づいたことや改めて確認できたことがあり、ネリーズなどは練馬らしさだと思うので、そういうところを活かして、地域に根ざした練馬らしさをどうやって活用するかが重要だと思う。

委員：完成したら誰に読んでもらうのだろうか。読む人がわかりやすくしないといけない。目的を達成するためには自分がわかるだけではなく、相手に理解をしてもらわなければ役に立たない。誰が読むのかを考えて作ってほしい。

副委員長：全体的には良く書けていると思う。特に国から下りてきた「地域共生社会」というものが、私たちが積み重ねてきたものと方向性は一緒だが、足元をすくわれた感じなので、そのあたりを森さんが書いてくださった。また、「練馬らしさ」という私たちが積み重ねてきたものが何だったのかをもう少し強調すれば、この計画はそんなに目新しいものではなく、地道に積み重ねていくしかないと思う。

ある委員から相談者に丁寧に寄り添っているというお話を聞いた。当事者が集まり、少し先を行っている当事者たちの姿を見て、後から来た人たちが力を得て、自立をしていくと聞いた。

ネリーズ懇談会でもそこで初めて出会えるタイプの人たちがいる。先ほどおっしゃったように、今は地域で活躍している人たちとの出会いも面白いが、発達障害の人やいろいろな課題を外に出せる人にも参加をしてもらい、そこでちょっと先を行く人たちも招き、力を得られるというか、その人たちの姿を見て、自分も大丈夫なのではないかなと思えるようになれば良いのではないだろうか。私もNさんと出会い、こんな生き方もあるんだと希望をもらった。そのような集まりを地道に続けるのは大事だと思う。

また、社会福祉法人等のネットとのコラボは、社会福祉法人等のネットができた時に、ネリーズとつながれば大きな力になると思っていた。先日、民生委員と話す機会があった。ひきこもりや孤立している人などいろいろなタイプの人たちと出会うが、自分では抱えきれずどうしていいのかわからないという問題をどこにつなげたらいいのかという話が出た。いろいろな分野の社会福祉法人があるので、そういうところと連携することで力を得られると思う。そういう中で少し先を言っている人たちの話も聞けると思う。そういうコーディネートをしていければ、もっと支え

あえる地域になっていくのではないかと思う。

委員長：これから本格的に肉付けをするので、ご意見等あれば、事務局へ寄せていただきたい。

職員：第4次を作る際には、絵本のようにとのご意見をいただいた。第5次も今は文章だけだが、コラムや事例もわかりやすく入れつつ、絵や写真も入れたいと考えている。

社協の主な関連事業の一覧は先ほど別表で説明させていただいた。第5次の評価は今後お示しをしたい。

また、委員の皆様から一言ということで、300字くらいで執筆いただきたい。9月中に提出をお願いしたいので、担当から改めてご依頼させていただく。

#### 4. 第5次地域福祉活動計画説明会について【資料2】

##### 1. 説明会について

住民の皆さんにも広く知っていただきたく5地区で説明会を行いたいと考えている。第4次計画の時には区報、ホームページ、民生・児童委員協議会などで周知をし、説明会を行った。その際に策定委員の皆様にもご協力をいただいた。今回も同様にどこかの地域にご参加、ご協力をお願いしたい。

関町、練馬、光が丘地区の日程と会場は資料の内容で大泉と石神井は会場未定だが、この日程で進めたいと考えている。

##### 2. 内容（案）

内容については検討が必要なので、詳細は次回の策定委員会でお伝えしたい。

##### 3. 今後のスケジュール

お示しした流れで進めていきたい。

#### 5. ネリーズ関係報告

##### 1. 懇談会

- ・大泉地区 8/30 会場：つくりっこの家クラブハウス 内容：見学・懇談
- ・石神井地区 10/3 会場：石神井相談情報ひろば はっぴーひろば 内容：見学・かるた
- ・光が丘地区 10/10 会場：防災学習センター 内容：見学・体験・懇談
- ・練馬地区 調整中

##### 2. かるた

6月にみんなの家（光が丘）で実施した。委員にもご協力いただいた。「出向いてかるたを説明する機会がとてもよかったので、ぜひ続けてほしい」など多数の感想をいただいている。

#### 6. まとめ（委員長・副委員長）

#### 7. その他

なし

#### 8. 次回の日程について

日時：令和元年10月28日（月）18：30～

場所：ココネリ研修室1

以上